

第2版はしがき

このたび第2版を上梓することができました。本書の旧版に興味を抱いてくださり、教科書として採用して頂いた先生方、購入して頂いた学生諸君、そして一般読者の皆様、この場を借りてお礼申し上げます。

初版で申しましたとおり、本書は、国際法入門書であり、「逆から学ぶ」ことをコンセプトとしています。つまり、抽象度が高い問題はなるべく後回しにし、「具体から抽象へ」と叙述することで、多くの教科書が採用している「抽象から具体へ」という順とは「逆から学ぶ」ことになるよう、構成されています。それがどこまで成功したかはわかりません。皆様の判断に委ねたいと思います。

また、初版はしがきで次のようにも述べました。

1990年以降、グローバリゼーションが進行し、現在では、人権、民主主義、市場経済は、誰も否定できない当然の価値のように感じられている。しかし、そうした価値優勢の国際法の在り方を立ち止まって考えてみないといけない時期であると思われる。本書は、冷戦以後の国際社会の変容を映した国際法の姿をなるべく忠実に描くようにしている。

本書では、今日の国際法を21世紀国際法と位置づけ、冷戦期の20世紀国際法と対比して検討しています。グローバリゼーション下の21世紀国際法では、とりわけ企業やNGOを含めた個人の権利・義務に焦点が当てられているように思えます。その一方で、アメリカ合衆国によるシリア空爆、ロシアによるクリミア半島併合、南シナ海での中国による覇権主張など、大国の横暴が見られるようになっています。武力行使禁止の国際法が破れているといえますし、その一方で、大国の武力行使を擁護する新しい国際法が生成されつつあるのかもしれない。もし後者であるとするれば、国際法を所与のものとして、批判的に検討することも重要になっています。昭和を知らない、20世紀を知らない読者諸氏には、現行の国際法を知るだけでなく、それを越えて、国際法及び国際社会を批判的に見る目を養って頂きたいし、本書を通して、そうした機会を提供できれば良いと考えてい

ます。

第2版では、初版の間違いを訂正し、できる限り新たな情報を盛り込むようにしました。本書は入門書ですので、なるべくかみ砕いたわかりやすい説明にするように改訂したつもりです。ただ、要望の強かった索引の挿入に関しては、諸般の事情でかないませんでした。次回改訂の機会があれば、検討する予定です。初版同様、皆様に親しんで頂ける教科書を目指しています。改善点や要望等がございましたら编者または法律文化社までお知らせください。

2018年7月26日

山形 英郎